

夏目漱石

一夜



一

夜

「美しくしき多くの人の、美しくしき多くの夢を……」と髯ひげある人が二たび三たび微吟びぎんして、あとは思案の体ていである。灯に写る床柱にもたれたる直なおき脊せの、この時少しく前にかがんで、両手に抱いだく膝頭ひざがしらに険険しき山が出来る。佳句を得て佳句を続つぎ能あたわざるを恨みてか、黒くゆるやかに引ける眉の下より安からぬ眼の色が光る。

「描けども成らず、描けども成らず」と椽えんに端居はしいして天下晴れて胡坐あぐらかけるが繰り返す。兼ねて覚えたる禅語に

て即興なれば間に合わす積りか。剛こわき髪を五分に刈りて髯貯えぬ丸顔を傾けて「描けども、描けども、夢なれば、描けども、成りがたし」と高らかに誦じゆし了おわつて、からからと笑いながら、室へやの中なる女を顧みる。

竹籠に熱き光りを避けて、微かすかにもすランプを隔てて、右手に違い棚だな、前は緑り深き庭に向えるが女である。

「画家ならば絵にもしましよ。女ならば絹を枠わくに張つて、縫いにとりましよ」と云いながら、白地の浴衣ゆかたに片足をそと崩くずせば、小豆皮あずきの座布団ざぶとんを白き甲すべが滑り落ちて、なまめかしからぬ程は艶えんなる居ゐずまいとなる。

「美しき多くの人の、美しき多くの夢を……」と膝抱ひざく男が再び吟じ出すあとにつけて「縫いにやとらん。縫いとらば誰たれに贈らん。贈らん誰に」と女は態わざとらしからぬ様さまながら一寸笑う。やがて朱塗の団扇うちわの柄にて、乱れかかる頬の黒髪をうるさしとばかり払えば、柄の先につけたる紫のふさが波を打って、緑り濃き香油かおの薫りの中に躍り入る。

「我に贈れ」と髯なき人が、すぐ言い添えて又からからと笑う。女の頬には乳色の底から捕え難き笑の渦が浮き上って、瞼まぶたにはさつと薄き紅くれないを溶く。

「縫えばどんな色で」と髯あるは真面目まじめにきく。

「絹買えば白き絹、糸買えば銀の糸、金の糸、消えなんとする虹にじの糸、夜と昼との界さかいなる夕暮の糸、恋の色、恨みの色は無論ありましょ」と女は眼をあげて床柱の方を見る。愁うれいを溶といて鍊ねり上げし珠たまの、烈はげしき火には堪えぬ程に涼しい。愁の色は昔しから黒である。

隣へ通う路次を境さかいに植さえ付けたる四五本の檜ひのきに雲を呼んで、今やんだ五月雨さみだれが又ふり出す。丸顔の人はいつか布団を捨てて椽えより両足をぶら下げている。「あの木立は枝を卸した事がないと見える。梅雨つゆも大分続いた。

よう飽きもせずひとに降るの」と独り言の様に言いながら、ふと思い出した体にて、吾が膝頭をちようちよう丁々ちようちようと平手をたてに切つてたた敲く。「脚気かっけかな、脚気かな」

残る二人は夢の詩か、詩の夢か、ちよと解し難き話しの緒いとぐちをたぐる。

「女の夢は男の夢よりも美しくしかる」と男が云えば「せめて夢にでも美しくしき国へ行かねば」とこの世は汚けがれたりと云える顔付である。「世の中が古くなつて、よごれたか」と聞けば「よごれました」と紈扇がんせんに軽かるく玉肌ぎよくきを吹く。「古き壺には古き酒がある筈、味あじわい給え」と男も鶯鳥がちよう

の翼はねを畳んで紫檀したんの柄をつけたる羽団扇で膝のあたりを
 払う。「古き世に酔えるものなら嬉しかる」と女はどこ
 までもすねた体である。

この時「脚気かな、脚気かな」と頻しきりにわが足を玩もてあそ
 べる人、急に膝頭をうつつ手を挙げて、叱しっと二人を制する。

三人の声が一度に途切れる間をククーと鋭き鳥が、檜の
 上枝を掠かすめて裏の禅寺の方へ抜ける。ククー。

「あの声がほとどぎすか」と羽団扇を棄ててこれも椽側
 へ這い出す。見上げる軒端を斜めに黒い雨が顔にあたる。
 脚気を気にする男は、指を立てて坤ひつじさるの方かたをさして「あ

ちらだ」と云う。鉄牛寺てつぎゅうじの本堂の上あたりでククー、ククー。

「一声でほととぎすだと覚る。二声で好い声だと思うた」と再び床柱よに倚りながら嬉しそうに云う。この髯男ほととぎすは杜鵑ほととぎすを生れて初めて聞いたと見える。「ひと目見てすぐ惚れるのも、そんな事でしょか」と女が問をかける。別に耻はずかすと云う気色も見えぬ。五分刈は向き直つて「あの声は胸がすくよだが、惚れたら胸は痞つかえるだろ。惚れぬ事。惚れぬ事……。どうも脚氣おやゆびらしい」と拇指むこしづねで向脛むこしづねへ力穴ききゅうじんをあけて見る。「九仞いっつきの上に一簣いっつきを加える。

加えぬと足らぬ、加えると危うい。思う人には逢わぬが
ましだろ」と羽団扇が又動く。「然し鉄片が磁石に逢^お
たら？」「はじめて逢うても会釈はなかる」と拇指の穴
を逆に撫^なでて澄ましている。

「見た事も聞いた事もないに、これだなと認識するのが
不思議だ」と仔細^{しさい}らしく髯^{ひね}を撚る。「わしは歌麻呂のか
いた美人を認識したが、なんと画を活^いかす工夫はなかる
か」と又女の方を向く。「私には——認識した御本人で
なくては」と団扇のふさを織^{ほそ}い指に巻きつける。「夢に
すれば、すぐに活きる」と例の髯が無造作に答える。「ど

うして?」「わしのはこうじゃ」と語り出そうとする時、蚊遣火かやりびが消えて、暗きに潜めるがつと出でて頸筋くびすじのあたりをちくと刺す。

「灰が湿っているのかしらん」と女が蚊遣筒を引き寄せ、蓋をとると、赤い絹糸で括くくりつけた蚊遣灰が燻いぶりながらふらふらと揺れる。東隣で琴と尺八を合せる音が紫陽花あじさいの茂みを洩れて手にとる様に聞え出す。すかして見ると明け放ちたる座敷の灯さえちらちら見える。「どうかな」と一人が云うと「人並じゃ」と一人が答える。女ばかりは黙っている。

「わしのはこうじゃ」と話しが又元へ返る。火をつけ直した蚊遣の烟けむりが、筒に穿うがてる三つの穴を洩れて三つの烟となる。「今度はつきました」と女が云う。三つの烟りが蓋の上に塊かたまって茶色の球が出来ると思うと、雨を帯びた風が颯さっと来て吹き散らす。塊かたまらぬ間うちに吹かるるときには三つの烟りが三つの輪を描いて、黒塗に蒔まき絵を散らした筒の周囲まわりを遶めぐる。あるものは緩ゆるく、あるものは疾とく遶る。またある時は輪さえ描く隙ひまなきに乱れてしまふ。

「茶毘だびだ、茶毘だびだ」と丸顔の男は急に焼場の光景を思い出す。「蚊の世界も楽じゃなかる」と女は人間を蚊に比

較する。元へ戻りかけた話しも蚊遣火と共に吹き散らされてしもうた。話しかけた男は別に語りつづけようともせぬ。世の中は凡てすべこれだと疾とうから知っている。

「御夢の物語りは」とややありて女が聞く。男は傍かたわらにある羊皮の表紙に朱で書名を入れた詩集をとりあげて膝の上に置く。読みさした所に象牙ぞうげを薄く削った紙小刀ナイフが挟んである。巻に余って長く外へ食はみ出した所だけは細かい汗をかいている。指の尖さきで触ると、ぬらりとあやしい字が出来る。「ここの湿し気けてはたまらん」と眉をひそめる。女も「じめじめする事」と片手に袂たもとの先を握つ

て見て、「香でも焚きましよか」と立つ。夢の話しは又延びる。

宣徳せんとくの香炉こうろに紫檀せいぎよくの蓋きざがあつて、紫檀せいぎよくの蓋きざの真中まんなかには猿さるを彫きざんだ青玉せいぎよくのつまみ手てがついている。女にの手てがこの蓋きざにかつたとき「あら蜘蛛くもが」と云いうて長い袖そでが横よこに靡なびく、二人ふたりの男おとこは共に床とこの方かたを見る。香炉こうろに隣となりる白磁はくじの瓶へいには蓮はすの花はながさしてある。昨日きのうの雨あめを蓑みの着きて剪きりし人の情なさけけを床とこに眺つぼみむる苔つぼみは一輪いちりん、卷葉まきばは二つ。その葉はを去いる三寸さんすんばかりの上うへに、天井てんけいから白金しろがねの糸いとを長く引ひいて一匹いっぴきの蜘蛛くもが——頗すこぶる雅みやびだ。

「蓮の葉に蜘蛛下りけり香を焚く」と吟じながら女一度に数弁を攫つかんで香炉の裏うちになげ込む。「蠨蛸しやうしやう懸不揺かかつてうごかず、篆烟てんえん遶竹梁ちくりようをめぐる」と誦じゆして髯ある男も、見ているままに払わんともせぬ。蜘蛛も動かぬ。只風吹く毎に少しくゆれるのみである。

「夢の話しを蜘蛛もききに來たのだろ」と丸い男が笑うと、「そうじや夢に画を活かす話しじや。ききたくば蜘蛛も聞け」と膝の上なる詩集を読む気もなしに開く。眼は文字の上に落おつれども瞳裏とうりに映ずるは詩の国の事か。夢の国の事か。

「百二十間の廻廊があつて、百二十個の燈籠とうろうをつける。百二十間の廻廊に春の潮うしおが寄せて、百二十個の燈籠が春風にまたたく、朧おぼろの中、海の中には大きな華表とりいが浮かばれぬ巨人の化物の如くに立つ。……」

折から烈しき戸鈴ベルの響がして何者か門口をあける。話し手ははたと話をやめる。残るはちよと居すまいを直す。誰も這入はいつて来た気色はない。「隣だ」と髯なしが云う。やがて渋蛇の目を開く音がして「又明晩」と若い女の声がかかる。「必ず」と答えたのは男らしい。三人は無言のまま顔を見合せて微妙に笑う。「あれは画じやない、活

きている」「あれを平面につづめればやはり画だ」「然しかしあの声は？」「女は藤紫」「男は？」「そうさ」と判じかねて髯が女の方を向く。女は「緋ひ」と賤いやしむ如く答える。

「百二十間の廻廊に二百三十五枚の額が懸って、その二百三十二枚目の額に画いてある美人の……」

「声は黄色ですか茶色ですか」と女がきく。

「そんな単調な声じゃない。色には直せぬ声じゃ。強しいて云えば、ま、あなたのような声かな」

「難ありがと有う」と云う女の眼の中うちには憂うれいをこめて笑の光が

漲みなぎる。

この時いづくよりか二疋ひきの蟻ありが這い出して一疋は女の膝の上に攀よじ上る。恐らくは戸迷とまどいをしたものであろう。上がり詰めた上には獲物もなく下り路をすら失うた。女は驚ろいた様もなく、うろろうろする黒きものを、そと白き指で軽かろく払い落とす。落されたる拍子に、はたと他の一疋と高麗縁こうらいべりの上で出逢う。しばらくは首と首を合せて何かささやき合える様であったが、この度は女の方へは向わず、古伊万里こいまりの菓子皿はじの端まで同行して、ここで右と左へ分れる。三人の眼は期せずして二疋の蟻の上に落

つる。髯なき男がやがて云う。

「八畳の座敷があつて、三人の客が坐わる。一人の女の膝へ一疋の蟻が上る。一疋の蟻が上った美人の手は……」

「白い、蟻は黒い」と髯がつける。三人が斉ひとしく笑う。

一疋の蟻は灰吹を上りつめて絶頂で何か思案している。

残るは運よく菓子器の中で葛餅くずもちに邂逅かいこうして嬉しさの余り

か、まごまごしている気合けはいだ。

「その画にかいた美人が？」と女が又話を戻す。

「波さえ音もなき朧おぼろづきよ月夜に、ふと影がさしたと思えばい

つの間にか動き出す。長く連なる廻廊を飛ぶにもあらず、

踏むにもあらず、只影のままにて動く」

「顔は」と髯なしが尋ねる時、再び東隣りの合奏が聞え出す。一曲は疾くにやんで新たなる一曲を始めたと見える。余り旨くはない。

「蜜みつを含んで針を吹く」と一人が評すると

「ビステキの化石を食わせるぞ」と一人が云う。

「造り花なら蘭麝らんじやでも焚き込めねばなるまい」これは女の申し分だ。三人が三様の解釈をしたが、三様共すこぶ頗る解しにくい。

「珊瑚さんごの枝は海の底、薬を飲んで毒を吐く軽薄の児」と

言いかけて吾に帰りたる髯が「それぞれ。合奏より夢の続きが肝心じゃ。——画から抜けだした女の顔は……」とばかりで口ごもる。

「描けども成らず、描けども成らず」と丸き男は調子をとりに軽く銀椀を叩く。葛餅を獲たる蟻はこの響きに度を失して菓子椀の中を右左りへ馳^かけ廻る。

「蟻の夢が醒^さめました」と女は夢を語る人に向って云う。

「蟻の夢は葛餅か」と相手は高からぬ程に笑う。

「抜け出ぬか、抜け出ぬか」と頻りに菓子器を叩くは丸

い男である。

「画から女が抜け出るより、あなたが画になる方が、やさしゅう御座んしよ」と女は又髯にきく。

「それは気がつかなんだ、今度からは、こちが画になりましよ」と男は平気で答える。

「蟻も葛餅にさえなれば、こんなに狼狽うろたえんでも済む事を」と丸い男は腕をうつ事をやめて、いつの間にやら葉巻おうようを鷹揚おうようにふかしている。

五月雨さみだれに四尺伸びたる女竹めだけの、手水鉢ちようずばちの上に蔽おおい重なりて、余れる一二本は高く軒せまに逼れば、風誘うたびに戸

袋をすって椽の上にもはらはらと所^{えら}扱^{えら}ばず緑りを滴^{したた}らす。「あすここに画がある」と葉卷の烟をぶつとそなたへ吹きやる。

床柱に懸けたる^{ほつす}扨子の先には焚き残る香の烟りが染み込んで、軸は若^{じゃくちゆう}冲の蘆^ろ雁^{がん}と見える。雁^{かり}の数は七十三羽、蘆^{あし}は固^{もと}より数え難い。籠ランプの灯を浅く受けて、深さ三尺の床なれば、古き画のそれと見分けの付かぬところに、あからさまならぬ趣がある。「ここにも画が出来る」と柱に靠^よれる人が振り向きながら眺める。

女は洗えるままの黒髪を肩に流して、丸張りの絹団扇

を軽く揺がせば、折々は鬢のあたりに、そよと乱るる雲の影、収まれば淡き眉の常よりも猶晴れやかに見える。桜の花を砕いて織り込める頬の色に、春の夜の星を宿せる眼を涼しく見張りて「私も画になりましたよか」と云う。はきと分らねど白地に葛の葉を一面に崩して染め抜きたる浴衣の襟をここぞと正せば、暖かき大理石にて刻める如き頸筋が際立ちて男の心を惹く。

「そのまま、そのまま、そのままが名画じゃ」と一人が云うと

「動くと画が崩れます」と一人が注意する。

「画になるのもやはり骨が折れます」と女は二人の眼を嬉しがらしようともしせず、膝に乗せた右手をいきなり後ろへ廻わして体をどうと斜めに反らす。丈長き黒髪がきらりと灯を受けて、さらさらと青畳に障る音さえ聞える。

「南無三、好事魔多し」と髯ある人が軽く膝頭を打つ。

「刹那に千金を惜まず」と髯なき人が葉巻の飲み殻を庭

先へ抛きつける。隣りの合奏はいつしかやんで、槌を伝う雨点の音のみが高く響く。蚊遣火はいつの間にもやら消えた。

「夜も大分更けた」

「ほととぎすも鳴かぬ」

「寝ましょか」

夢の話しはつい中途で流れた。三人は思い思いに臥床ふしどに入る。

三十分の後彼等は美しくしき多くの人の……と云う句も忘れた。ククーと云う声も忘れた。蜜を含んで針を吹く隣りの合奏も忘れた、蟻の灰吹を攀よじ上った事も、蓮の葉に下りた蜘蛛の事も忘れた。彼等は漸く太平に入る。

凡てを忘れ尽したる後女はわがうつくしき眼と、うつくしき髪の主である事を忘れた。一人の男は髯のある事

を忘れた。他の一人は髯のない事を忘れた。彼等は益々
太平である。

昔し阿修羅あしゅらが帝釈天たいしゃくてんと戦って敗れたときは、八万四
千の眷属けんぞくを領して藕糸孔ぐうしこうちゆう中に入いって蔵かくれたとある。維摩ゆいま
が方丈の室に法を聴ける大衆は千か万かその数を忘れ
た。胡桃くるみの裏うちに潜んで、われを尽じん大千世界だいせんの王とも思わ
んとはハムレットの述懐と記憶する。粟粒芥顆ぞくりゆうかいかのうち
に蒼天そうてんもある、大地もある。一生師いっせいに問うて云う、分子
は箸はしでつまめるものですかと。分子は暫く措おく。天下は
箸の端さきにかかるのみならず、一たび掛かけ得れば、いつで

も胃の中に収まるべきものである。

又思う百年は一年の如く、一年は一刻の如し。一刻を
 知れば正まさに人生を知る。日は東より出でて必ず西に入る。
 月は盈みつればかくる。徒いたずらに指を屈して白頭に到るも
 のは、徒ほつほつらに茫々たる時に身神を限らるるを恨むに過ぎ
 ぬ。日月は欺くとも己れを欺くは智者とは云われまい。
 一刻に一刻を加うれば二刻と殖えるのみじゃ。蜀しよくせん川十
 様の錦にしき、花を添えて、いくばくの色をか変ぜん。

八畳の座敷に髯のある人と、髯のない人と、涼しき眼
 の女が会して、斯かくの如く一夜を過した。彼等の一夜を描

いたのは彼等の生涯しょうがいを描いたのである。

何故なぜ三人が落ち合った？ それは知らぬ。三人は如何いかなる身分と素性と性格を有する？ それも分らぬ。三人の言語動作を通じて一貫した事件が発展せぬ？ 人生を書いたので小説をかいたのではないから仕方がない。なぜ三人とも一時いちじに寝た？ 三人とも一時に眠くなつたからである。

(三十八年七月二十六日)

日本文学電子図書館

倫敦塔・幻影の盾

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館